

2012 年度春期

計算機数学 (情報理工学科)

電子計算機概論Ⅰ (数学科)

(担当: 角皆)

本講義の概要

「計算」を対象とする数学

- 「計算」の定式化
- 「計算」の実現
- 「計算」の量と質

→ 「計算する」とは?

「計算する」とは?

「計算」

||

計算機で行なえること

では、計算機では何を行なっているのか?

計算機

- アナログ計算機
 - ★ 物理量
 - ★ 図式計算 (計算図表・ノモグラム)
 - ★ 計算尺
- デジタル計算機
 - ★ プログラム機構方式
 - ★ プログラム入力方式
 - ★ プログラム内蔵方式
(von Neumann 方式)
- 量子計算機

本講義の概要 (案)

- 「計算」の実現：計算機
 - ★ 数の表し方・二進法・Boole 代数
 - ★ 計算機の実現
論理回路・演算回路・順序回路
 - ★ 計算 (プログラム) の実際
簡易アセンブラ

本講義の概要 (案)

- 「計算」の定式化
 - ★ 計算機のモデル化
有限オートマトン・Turing 機械など
 - ★ 計算機の扱う言語・文法
正規表現・生成文法・文脈自由言語など
 - ★ 計算可能性の理論
普遍 Turing 機械と対角線論法

既習事項 (かどうか) の確認

- 計算機での数の扱い方
 - ★ 二進法表示
 - ★ 桁溢れ判定
 - ★ 符号付き整数の表現 (“2 の補数表示”)
 - ★ **Endian** について
 - ★ 浮動小数点数 (指数部・仮数部)

既習事項 (かどうか) の確認

- 計算機の実現
 - ★ 論理ゲート (NOT・OR・AND)
 - ★ **Boole** 代数
 - ★ 演算回路 (加算機・multiplexer など)
 - ★ 順序回路 (feedback 回路による状態保持)
- 計算 (プログラム) の実際
アセンブラプログラミング

計算機での情報の表し方

計算機内では全てのデータを **0,1** の組 (列) で表す

情報の最小単位 :

0 か 1 か : **bit** (**binary digit**)

実際には幾つかの **bit** を組にして一度に扱う

(通常は 8 **bit** = 1 **byte** (**octet**))

1 **byte** で $2^8 = 256$ 通りの値を表せる

計算機での数の表し方

計算機内の **0,1** の列を、
二進表記 (二進法) で数値として扱う

正の整数の場合、1 byte で

$$0 \leq x \leq 2^8 - 1 = 255$$

の範囲の値が表せる

十進表記 \longleftrightarrow 二進表記の変換

十進	二進
0	00000000
1	00000001
2	00000010
3	00000011
4	00000100
5	00000101
⋮	⋮
253	11111101
254	11111110
255	11111111

二進の九九 (一一?) の表

+	0	1
0	0	1
1	1	10

×	0	1
0	0	0
1	0	1

文字の表し方

符号化 (coding) して数値 (文字番号) で表す
(文字コード)

アスキーコード (ASCII code) 対応表

	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	a	b	c	d	e	f
2		!	"	#	\$	%	&	'	()	*	+	,	-	.	/
3	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	:	;	<	=	>	?
4	@	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
5	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	[\]	^	_
6	'	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o
7	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	{		}	~	

計算の理論

計算機に於ける「計算」の各ステップ
(= 命令の実行) は、

計算機内の記憶素子 (メモリ) の
現在の値 (状態) に従って、

その値を変更 (書込) すること

計算の理論

プログラム内蔵方式 (von Neumann 型) では、
プログラム・データを区別なくメモリ上に置くが、
プログラムとデータとは、やはり本質的に違う

- プログラム：一つの問題では固定
- データ：可変な入力



どんな (有効な) データ (入力) が来ても、
所定の出力を返すことが要請される

計算の理論

或る問題の「計算が可能」



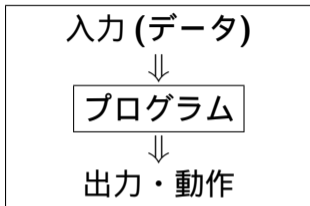
その計算を行なうプログラムが存在



計算機の機能 (= 「計算」のモデル) を決めて議論

→ 代表的な「計算のモデル」を幾つか紹介

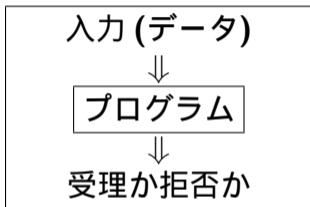
問題を「計算する」とは



原理・理論を考える際には、
出力は最も単純に「0 か 1 か」とする

- 0 : 拒否 (**reject**)
- 1 : 受理 (**accept**)

「問題」とは



解くべき「問題」：入力を受理する条件

「問題」の例

入力の範囲：文字 a, b から成る文字列

「問題」：入力を受理する条件

- a と b との個数が同じ
- a が幾つか続いた後に b が幾つか続いたもの
- a で始まり a, b が交互に並んで b で終わる
- 同じ文字列 2 回の繰返しから成る
- 回文 (palindrome)

などなど

「問題」とは

それぞれの「問題」に対し、
定められた計算モデルで、
受理 / 拒否判定が可能 (問題が解ける) か？

受理される文字列が
「文法に適っている」文字列だと思えば、

「問題」とは「文法 (言語)」である

「文法に適っている」かどうかの判定
… 「構文解析 (syntactic analysis)」

代表的な計算モデル

- 有限オートマトン (有限状態機械)
- プッシュダウンオートマトン
- チューリングマシン など

チューリングマシン

無限 (非有界) のメモリにランダムアクセスできる
計算機モデル

Church-Turing の提唱

「全てのアルゴリズム (計算手順) は、
チューリングマシンで実装できる」
(アルゴリズムと呼べるのは
チューリングマシンで実装できるものだけ)

… 「アルゴリズム (algorithm)」の定式化

万能チューリングマシン

プログラム内蔵方式 (von Neumann 型)

… プログラムもデータとして保持

→ 一つの機械で様々な計算を柔軟に実現

同様の働きをするチューリングマシンが存在

… 万能チューリングマシン

(universal Turing machine)

全てのチューリングマシンの動作を模倣する

計算可能性の理論

チューリングマシンは、
どんな問題 (言語) でも計算できるのか?

「計算できる」とは?

- 認識する：
正しければ受理 (そうでなければ受理しない)
- 判定する：
正しければ受理、そうでなければ拒否

(認識可能だが) 判定不可能な問題が存在する!!

計算量の理論

問題の難しさを如何に計るか？

→ (計算モデルを固定して)
解くのに掛かる資源の分量で計る
… 計算量 (**complexity**)

- 時間計算量：計算に掛かるステップ数 (手間)
- 空間計算量：計算に必要なメモリ量 (場所)

計算量の理論

計算量はアルゴリズム (計算方法) によって変わる
… アルゴリズムの計算量
→ アルゴリズムの効率 の評価

問題の計算量：

その問題を解くアルゴリズムの計算量の下限

最も効率良く解くと、どれ位で解けるか

= どうしてもどれ位必要か

= どれ位難しい問題か

→ 問題そのものの難しさ の評価

計算量の理論

入力データが大きくなれば計算量も増える

→ 入力データ長に対する増加のオーダーで表す
(Landau の O-記号)

多項式時間 $P \dots \exists k : O(n^k)$

“事実上計算可能な難しさ”

「しらみつぶし」が入ると

大体 $O(2^n)$ 程度以上になる (指数時間 EXP)

“事実上計算不可能”

計算量の例

- 加法 : $O(n)$
- 乗法 : $O(n^2)$ かと思いきや $O(n \log n \log \log n)$
(高速 Fourier 変換 (FFT))
- 互除法 : $O(n^3)$ (FFT で $O(n^2 \log n \log \log n)$)
- 素数判定 : 多項式時間 P
- 素因数分解 : 多項式時間 P かどうか判っていない

“非決定性” 計算量

あてずっぽうを許して、

うまくいけばどの位で解けるか
= 答を知って、その検証にどの位かかるか

非決定性多項式時間 (NP) :

非決定性の計算モデルで多項式時間で解ける

例 : 素因数分解は **NP**

… 素因数を知っていれば割算するだけ

未解決問題 (**P vs NP Problem**)

$$P = NP$$

であるか否か？

“The Millennium Problems”

の 7 つの問題のうちの 1 つ

参考 : The Millennium Problems

2000 年に Clay 数学研究所 (CMI) により
賞金 \$1M が懸けられた 7 つの問題

- Birch and Swinnerton-Dyer 予想
- Hodge 予想
- Navier-Stokes 方程式の解の存在と微分可能性
- P vs NP 予想
- Poincarè 予想 (Perelman により解決 (2003))
- Riemann 予想
- Yang-Mills 方程式と質量ギャップ問題